九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

チーム活動における「暗黙の協調」に関する実証的研究

秋保，亮太

https://doi.org/10.15017/1806795

出版情報：九州大学，2016，博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式３）

氏　　名　：　秋保亮太

論 文 名　：　チーム活動における「暗黙の協調」に関する実証的研究

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，これまでのチーム研究の動向をレビューした上で，チーム活動の効率化という観点から暗黙の協調という概念に焦点を当てた。“暗黙の協調はいかにしてチームに備わるのか”をリサーチ・クエスチョンとして掲げ，暗黙の協調が発生・促進・維持されるメカニズムを解明することを目的に，従来実施されてこなかった実証的研究を行った。

研究 1 では，暗黙の協調の実現過程に関する実証研究に先立って，先行研究で指摘されてきた暗黙の協調に関連する理論的示唆の検証と統合的理解を行った。具体的には，チーム・ダイアログがチーム・パフォーマンスへ与える影響に関して，共有メンタルモデルが調整効果を持つか検討を行った。大学祭において模擬店の営業を行った団体チームを対象に，質問紙調査を実施した。その結果，チーム・ダイアログは客観的なチーム・パフォーマンス（目標売上達成度)へ単純な促進的効果を持っているのではなく，メンタルモデルを共有している程度によって影響が異なることが明らかになった（Figure 1)。メンタルモデルが共有されている場合，チーム・ダイアログは目標売上達成度に関連せず，一定の高いパフォーマンスを示していた。一方，メンタルモデルが共有されていない場合は，チーム・ダイアログが少ないと目標売上達成度も下がることが示された。以上より，メンタルモデルを共有しているチームは対話せずとも成果を挙げることが明らかになった。暗黙の協調がチームに備わる上で，メンタルモデルを共有することが重要であることが示唆された。

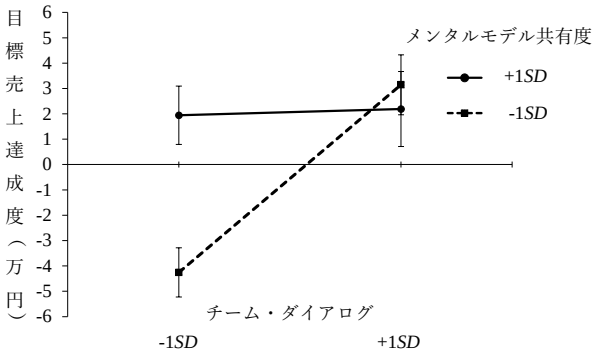

Figure 1　メンタルモデル共有度とチーム・ダイアログの交互作用

Note. エラーバーは標準誤差を示す

続く研究 2 では，研究 1 の知見を踏まえつつ，実際に暗黙の協調が実現に至る過程やその促進要因について議論を行った。具体的には，研究 1 で残された問題点を考慮しつつ，暗黙の協調がチームに備わる過程を明らかにするため，チームの振り返りと共有メンタルモデルが暗黙の協調へどのように影響しているのか検討を行った。ラビリンスゲームを用いた実験室実験を実施した結果，暗黙の協調が徐々に実現されていく過程と，その実現に関してチームの振り返りが正の効果を持つことが分かった（Figure 2)。また，チームの振り返りが暗黙の協調の実現に及ぼす影響に関して，研究 1 と同様の形で共有メンタルモデルが調整効果を持つ可能性が示唆された。以上より，研究 2 では，暗黙の協調の実現はチームで振り返ることにより促進されることが明らかになった。

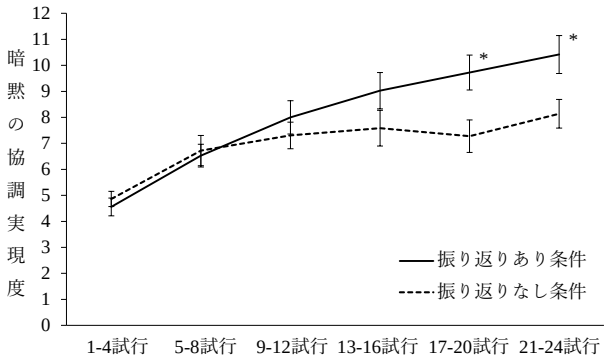

Figure 2　暗黙の協調実現度に関する分散分析結果

Note. エラーバーは標準誤差を，*は条件差が見られた箇所を示す

最後に，研究 3 では，研究 2 で得られた暗黙の協調の実現過程を踏まえつつ，暗黙の協調の世代間継承の有無について議論を行った。具体的には，研究 2 で残された問題点を考慮しつつ，チームに備わった暗黙の協調が次世代のメンバーへ入れ替わった際に継承されるか検討を行った。ラビリンスゲームを用いた実験室実験の結果，メンバーの入れ替わり時における社会的学習によって，暗黙の協調が維持される傾向にあることが示唆された（Figure 3）。しかし，チームの振り返りによるメンバーの心理的側面の変化については明らかにできなかった。以上より，本研究では，次世代へのチームワークの継承の可能性が示唆された。ここから，研究 2 のような実現過程を経てチームに備わった暗黙の協調は，メンバーが入れ替わっても維持される傾向にある可能性が考えられる。

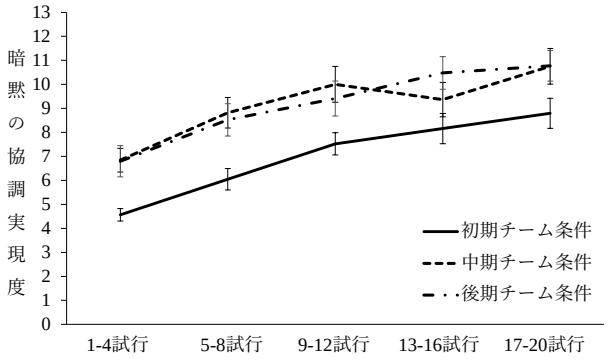

Figure 3　暗黙の協調実現度に関する分散分析結果

Note. エラーバーは標準誤差を示す

本論文で得られた知見は，次のようにまとめられる。研究 2 および研究 3 の結果から，チームの振り返りが暗黙の協調の実現を促進することが示された。この結果は，いくら“暗黙”の協調とは言え，チームに暗黙の協調が備わるためには普段からの“明示的”コミュニケーションが重要であることを示唆している。また，研究 1 および研究 2 の結果から，共有メンタルモデルは暗黙の協調の実現に無関係というわけではなく，調整効果を持つことが示唆された。暗黙の協調がチームに備わる上で，メンタルモデルを共有することが重要である可能性が考えられる。

本論文では，チームワークの行動的側面と心理的側面の双方を合わせて，総合的な議論・検証を行った。暗黙の協調に関連すると考えられる要因の関係性を複合的に捉え直し，先行研究の統合的理解とその発展に成功した。また，本論文では，暗黙の協調に関する実証的検討を行ってきた。これは，従来のチーム研究では踏み込めていなかった新たな領域である。暗黙の協調について検討することでチーム活動の効率化について議論を進めてきた本論文の知見は，チーム活動の無駄を把握するための有用な示唆と，改善に向けた介入への実用的知見を与え得る研究の一助になるものと考えられる。本論文の知見を基礎として，現実のチームのマネジメントに応用可能な研究が進められていくことが望まれる。